
研究・開発を楽しむために

高分子材料研究所長
栗山 晃

当社のような材料メーカーの中で、研究・開発というと、直ぐに研究部門がやる事という思いがちである。しかし、よく考えてみると、大学では自然科学系学科だけでなく、文学や経済などあらゆる分野での研究が行なわれている。大学で行なわれる研究であっても、我々企業で行なっている研究であっても、本来『知りたい』という人間が持つ、能動的欲求の充足活動ではなからうか。研究するという行為は日常生活の中でもごく自然に行なっている非日常的活動の中にも見られる。新車を買って換えるときなどは、一生懸命カタログを集め、得られた情報を比較し、どれにしようかと迷いながらも決断をする。このように、欲しい物の事を『知りたい』と思えばその情報を集め、集めた情報を比較し、判断を下す。このような事は、日常的に良くある事である。

それだけではない、『知りたい』と思う事、『知れた事』を実際に活用することは、人間らしい恋愛という行動に、最もよく現れる。好きになった人については、何でも知りたいし、知れた事を活用して、自分を好きになってもらおうとする。このように考えると、人間本来の欲求に基づく行動である『恋愛』と『研究・開発』という活動が非常に良く似ている事に気付く。研究するという行動が、『知りたい』という人間が本来持つ、能動的欲求の充足活動であるとすれば、『研究・開発』は本来人間にとっては、楽しいものであるはずである。

問題は、このような行動をしたいと何故考えるかである。人を『研究・開発』と言う行動にかりたてる原動力は何なのか、動機付けるものが何かが問題である。

大学においてもそうであるように、企業においても『研究テーマ』と言うものは殆ど与えられるものである。自分がやりたいと言って、自らがテーマを設定しそれをやれる事はめったに無い。テーマを設定する場合、一番大切な事は、そのテーマを何故するのかという、目的を明確にする事である。時として、目標は明確であるが、目的が曖昧な事がある。研究者にとって明確な動機(目的)が無ければ、非日常的でストレスのかかる研究・開発をやり続け、成果を得る事は難しい。明確な動機があれば、後は研究者の欲求に基づく能動的活動としての『研究・開発』が楽しくできるようになり、多くの成果が期待できるようになる。

研究・開発に携わる者は、テーマに取り掛かる前に先ず目的を明確にするべきである。与えられたから、頼まれたからなどと言う事では研究・開発は進められない。我々企業における研究テーマは、多くの場合ユーザーニーズに基づく場合が多い。どのような品質や機能の物が望まれているかと言う事は直ぐに聞ける。しかし、このテーマの目的が何なのかを十分に我々が理解するまでには、かなりの時間を要する。我々の開発した物が市場に対して、どのようなメリットを生み出せるのかを十分に調べ、テーマをやり続けるに足る十分な動機付けを行うことが、研究・開発を能動的な活動にし、楽しんで取り組めるようにするためには必要不可欠である。

明確な目的を持つための方法として、開発者の立場で無く、ユーザーの立場で考えてみる事も有効である。我々の商品を直接買って頂けるユーザーだけでなく、その先々のユーザーの立場にも立って見る事である。最終的には、消費者として商品を見てみる事である。開発者が本当に欲しいと思えるかどうか、それが開発を動機付ける上では重要な事で有ると思う。

本誌が、我々の開発した商品を評価頂ける多くの研究者のお役に少しでも立てていただける事や、いっそうの情報交換の一助となって我々メーカーの研究開発の動機付けに繋がる事を期待し、巻頭の言葉としたい。
